

# 裏路地探険

旧大屋町の中心地であった養父市大屋町大屋市場。名前の通り、かつては市場が開かれていた場所であり、商業の町として栄えてきた。天滝や大杉さんご踊りで知られる西谷地域と、明延鉱山のある南谷地域の分岐点であることから、人や物が集まるターミナルとして発展していった。

定期市の始まりは定かではないが、大正の頃まで、道の両側に仮屋を建てて市が開かれたと言う。

6、7月に夏市、12月に冬市があり、盆や暮れ、正月の時期にも市が立った。昆布や塩マス、数の子などの海産物から、下駄や反物、鎌のような刃物類などの商品が売られた。商人が寝泊まりするため、宿屋も5軒あったそう。毎年の楽しみとして、行李を首にかけて地元の人が大勢集まり、



商店が軒を連ねた通りには、レトロな看板を残すお店や、うだつを掲げた旧家が今も残っている。大正頃まで定期市が立ち、その後、常設店ができていった。



カーブをかけた屋根のしつらえは職人技!!(下)



軒下を支える大黒天!?(上)とても手の込んだ格子窓(下)



日枝神社(中)と天満宮(左)。鳥居が2つもあり、その理由は大屋市場の氏神であった天満宮が、明治の中頃、同地に移ってきたことによる。秋祭りにはツバキの枝に当たりくじを付けた、「樺まき」と呼ばれる珍しい行事が残されている。

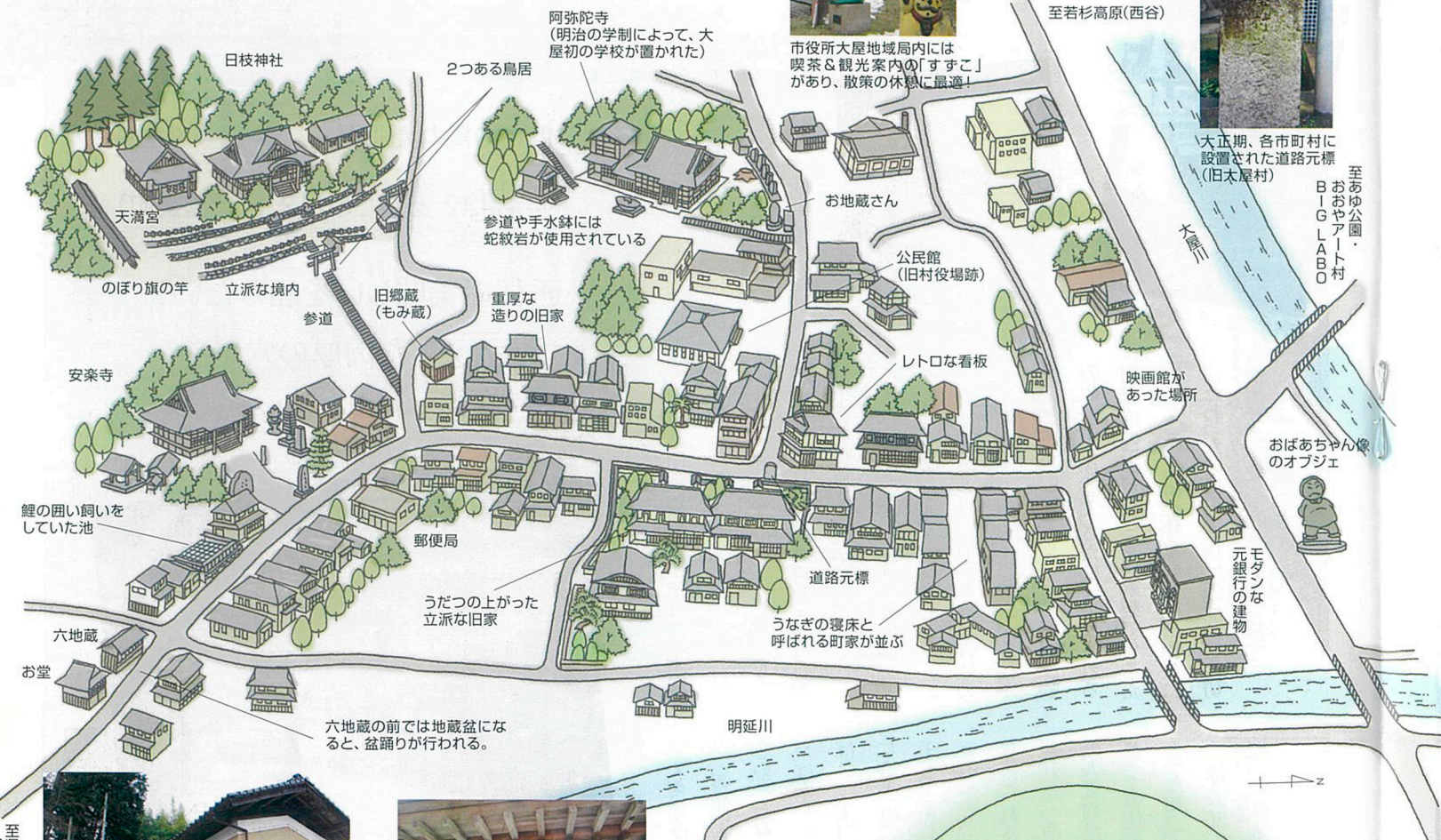
町中は大いに賑わった。

「この定期市を元に、常設店ができるようになり、商品がいつでも買えるようになりました。役場や農協、映画館もあり、昭和30年代は特に賑わいを見せた時代です」とは、案内役の野崎啓生さん。

その繁栄ぶりを表すように、高台にある日枝神社と天満宮は立派な造り。祭りの際には氏子の心意気を示す長さ約14メートルもあるのぼり旗を掲げるそう。高年齢が進む今では旗を立てるのにひと苦労」と笑って話してくれた。

鳥居が2つもあるのは、元々隣りの山路地区の氏神である日枝神社の場所に、大屋市場の氏神である天満宮が移ってきたことが理由。天満宮の彫刻は招き猫の木彫で知られる地元作家・松田一蔵氏の作品で、温かみのある雰囲気醸

## URAROJI TANKEN



かつては凶作に備えるためのもみが保管されていた郷蔵(共同の倉庫)。現在はコミュニティ施設として改修されている。



氏神である天満宮には、地元の木彫作家・松田一蔵氏によって、龍や獅子、狸(ばく)の彫刻が彫られている。さすがは木彫フォークアートの町!



呉服屋だったお家にはレトロな看板が残る

### 大屋富士

富士山のような山容からその名が付いたシンボリックな山。昔は遠足でよく登ったと言う。おおやアート村BIG LABOから眺めると、富士山のような姿をよりはっきりと見ることができる。

●皆さん「T2裏路地探険」に参加してみませんか!!  
平成26年4月19日(土) 10:00~12:00  
「ほたるの郷を歩く」豊岡市出石町奥山  
\*上記実施日の10日前までに、18ページに掲載の但馬の情報誌「T2」編集部まで、住所・氏名・年齢・電話番号・「T2裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキで申し込みください。開催当日は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切後、参加ご希望の方へ郵送にて案内を送付します。

し出ししている。通りにはうだつの揚がった重厚な古民家やレトロな旧商店、モダンな旧銀行の建物などが残り、当時の様子を今に伝えている。「うなぎの寝床」と呼ばれる、間口が狭くて奥行き深い民家が軒を連ねており、町並みを形成する大きな特徴となっている。大正7年に大火に見舞われたことから、道路幅が拡張され、通り沿いには現在も残る水路が整備された。これらの費用は全て住民の負担だったそう。通りを歩けば、どこか懐かしい風情が残る大屋市場の町並み。明延川を挟んで、東側にそびえる大屋富士が、さらに町の景観に華を添える。静かな時間の中で、往事の息づかいが聞こえてきそう。